

[特集]

総合内科医としての インプレッシブ・ ケース集

総合内科医はいるのか？

[Chapter 1] 序論

[Chapter 2] 私のインプレッシブ・ケース

[鼎 談] 総合内科医はいるのか？

本特集に通底するテーマは、見てのとおり「総合内科(医)」である。「総合内科とは？」という課題について議論されているのを見かけることはたまにあるが、結局は「総合」という言葉の捉え方(の個人差)に行き着くと個人的には思っている。

もし「総合」というのを「全人的」のような意味で捉えている医学生・医師がいたら、それは実に危ういことだと思う。実は三省堂の『スーパー大辞林 3.0』というスマホアプリでは、「全人的医療」について以下のように説明している。

ぜんじんてきいりょう【全人的医療】: 個々の疾患のみを対象にするのではなく、患者の心身の状態や過去の病歴、家族環境、生活環境などにも着目し、病んでいる人間の全体像をとらえて診療する総合的な医療。
→クオリティー・オブ・ライフ・ホリスティック・ヘルス

また、「全人的」という語を検索してみると、ヒットするのは医療系ばかりで、主に緩和医療関連の事柄の見出しである。緩和ケアの世界にはトータルペインという言葉があって、それについてのアンサー的な概念が「全人的医療」なのかもしれない。

総合内科というものが、“全人的内科”と同義とは思えないところが私にはある。内科学が総合的であることの意味や意義は、「全人的」などとは別の次元にあるような気がしてならない。やや大上段に構えすぎたが、本特集のねらいの源泉はそのようなところにある。

私からの投げかけは、「総合内科医とよべる臨床医はいるのだろうか?」、すなわち総合内科医というものが「居るのか?」また「要るのか?」というものである。

本特集では、このことを直接的に扱うのは序論そして鼎談のなかでのみにとどめた。実際には、私にとって「この先生の診療や人となりをもっと知りたい」と思える臨床医をまず独断で選び、そしてその先生方に印象に残った症例の叙述をお願いし、それぞれの先生の臨床医としての姿を読者が窺い知ることができるように仕向けた。

いつも思うが、症例記述というのは、単なる例外的な事例報告ではない。個別的ではあるが、汎用性がないわけではない。むしろ個別性が高ければ高いほど、ある読み手にとっては抽象的な理解となり、未来の未知の問題に強くなることができると信じている。とにかく今日は、読み物を読むつもりで気軽に通読してみていただきたい。

國松淳和
(南多摩病院 総合内科・膠原病内科)